

シェイクスピアの〈目〉のイメージに 関する研究 (1)

鳴島史之

(昭和62年9月30日受理)

A Study on Shakespeare's Eye Imagery (1)

by Fumiyuki NARUSHIMA

In his *Sonnets*, Shakespeare often uses the word *eye* in the context of death imagery. I will try to explain why these two images are connected in Shakespeare's mind. I argue that the rhyme *eye-die-lie* was one of the causes of this association. Although Spurgeon says that eye and death are semantically related, I think Shakespeare was more concerned with the sounds of words when he was writing verse. I will examine how the rhyme is reflected in the *Sonnets*.

Next, I will analyze other words that indicate death—*grave*, *plague*, *time*. I also show that death images are frequent in a context in which *see* or *look* appears.

序

この論文では、Shakespeare のイメージを扱う。Shakespeare 作品にあらわれる具体的なイメージの一例として、ここでは〈目〉のイメージを取りあげ、どういった特色があるのか、そして彼がどのぐらい他の作家あるいは時代の環境から影響を受け、それをどう自分の作品に生かしていったかを考えてみたい。

論文は基本的に三つの部分に分かれる。(1) Shakespeare の作品における *eye* という語に関連したイメージの位置付け。(2) その問題に付随して出てくる Shakespeare と他の作家との比較の問題。(3) Shakespeare の作家としての成長に伴って、そのイメージの問題はどのような変遷を遂げるか。以上のようなことを考えていきたい。

第一章では、まず扱う作品を *Sonnets* に限定して考察する。最初に *Sonnets* を検証する理由は、(1) 比較的初期に書かれた作品であり、Shakespeare を年代順に研究するには適切であること。(2) 一編一編の区切れが明確なので、image cluster¹⁾ の問題に入りやすいこと。(3) 韻とイメージの関係を扱うのにも適していること。以上三点である。第一章では、*eye* という語に関するイメージの諸問題を提示する。第二章では、Shakespeare と他のエリザベス朝の *Sonnets* 作家との比較を行う。第三章において、その *Sonnets* におけるイメージを土台にして Shakespeare の他の劇作品を扱う。

第一章 Sonnets

Shakespeare が *eye* という語に何を連想したかを *Sonnets* について考えるのが、この章の目的になる。通例、人がある語を聞いて、何を想像するかは、個人によって、あるいはまた環境によって異なるわけであるが、Shakespeare の作品を通じて、彼が *eye* という語を使うときにどのようなイメージを心に描いていたかを、少しでも解明したいと思う。

第一節 「目」と「死」

1.1. *Sonnets* の中で、*eye* という語はしばしば死を話題にする文脈に出てくる。²⁾ まず *Sonnets* の「目」と「死」の関係について述べる。*die* と *eye* の関係は第1番のソネットから明らかな形であられる。

From fairest creatures we desire increase,
That thereby beauty's rose might never *die*,
But as the riper should by time de cease,
His tender heir might bear his memory:
But thou, contracted to thine own bright *eyes*,
Feed'st thy light's flame with self-substantial fuel,
Making a famine where abundance *lies*,
Thyself thy foe, to thy sweet self too cruel. (1-8)³⁾

ここで“eyes”は“die”とは押韻せず、“lies”と韻を踏む。“lies”は第2番目のソネットでも“eyes”と押韻している(5-7)。1番, 2番いずれの場合でも *lies* は be 動詞の意味であり、「死」の意味はない。しかし、*lie* が「死ぬ」という意味をも持ち得ることから考えて、この三語は意味的、音的に密接に結び付き合っていると考えられる。このようにまず気付くのは、*eye-die-lie* の三者間の韻を要にした連想パターンである。

lies と *eyes* は *Sonnets* の中でよく韻を踏む。*Sonnets* 全体の中の12個の *lies* のうち7つは *eyes* と押韻する。そして *lie* 13個のうち2個は *eye* と韻を踏む。⁴⁾

die が実際に *eye* と韻を踏むのは、9番と25番で、それ以後 *die* は2回 *lie* と押韻する。ちなみに、*die* は全体で12回あられる。*dies* は1例しかなく、*eyes* と押韻しない。また、*eye* は全体で38回、*eyes* は51回ある。

このように、韻の問題は Shakespeare の連想パターンの一端を語ってくれるのだが、そういう韻以前に、「死」のイメージと *eye* が密接にむすびついていたと考えさせる例が、他に多くみられる。例えば、18番のソネットをとりあげてみよう。

Nor shall *Death* brag thou wand'rest in his shade,
When in eternal lines to time thou grow'st.
So long as men can breathe or *eyes* can see,
So long lives this, and this gives life to thee. (11-14)

ここでは *die* は出てこないが、“death”と“eyes”が互いに近くに使われる。つまりこの例では、*eye*と*die*の音韻的な関係よりも、「目」と「死」の意味的なつながりの方が重要であるということになる。こういった例も *Sonnets* には少なくはなく、*death* をとりあげると、*death* (及びその変化形) が *eye* の出てくるものと同一のソネット内で使われる例は、5例ある。そしてその5例のうち、1例を除くと、*die* という語は、そのソネット内にあらわれない。そして、その例外の1例の中で実際に *die* と韻を踏んでいるのは、*eye* ではなく、*lie* である。すなわち、*die* という語をまったく経由しなくても、Shakespeare は *death* という語を *eye* という語のそばで使う癖があると思われる。(*death* 及びその変化形は、*Sonnets* 全体で22例ある。)

dead についてみれば、*dead* が *eye* とおなじ文脈に出るのは5例ある。(ソネット単位で5例、実際の *dead* の数では、同一ソネットに2回出るのが1例あるので6個。また、*dead* は *Sonnets* の中に16回出る。) そして *dead* の場合でも、*death* の時と同じく、1例を除いて、*die* と同じ文脈にはあらわれない。そしてその例外を *dead* と *death* は共有している。つまり、*dead* と *death* が、*die* と共にあらわれるのは、全ソネット中1回だけで、そのソネットの中に *eyes* もあらわれるが、その *die* は *eyes* との音韻関係はなく、*lie* と韻を踏むのである。それは81番のソネットである。

Or I shall live your epitaph to make,
 Or you survive when I in earth am rotten;
 From hence your memory *death* cannot take,
 Although in me each part will be forgotten.
 Your name from hence immortal life shall have,
 Though I (once gone) to all the world must *die*;
 The earth can yield me but a common grave,
 When you entombed in men's *eyes* shall *lie*;
 Your monument shall be my gentle verse,
 Which *eyes* not yet created shall o'er-read,
 And tongues to be your being shall rehearse,
 When all the breathers of this world are *dead*;
 You still live (such virtue hath my pen)
 Where breath most breathes, even in the mouths of men.

ここでわかるように、確かに *eye*, *die*, *lie* の三者は音韻的に深くむすびついているのだが、実際に音韻関係を持っているのは、*die* と *eye* とではなく、*lie* と *eye* との場合が多いようで、「死」のイメージそのものは音韻を離れたところで意味的に深く *eye* と関わっていることが観察できるようである。

1.1.1. *lie* の韻は *lie* 自体の意味と関わりがあるのだろうか。 *lie* には「存在する」、「嘘をつく」(動詞)、「嘘」(名詞)と基本的に三つの意味があるが、どの場合に *eye* と韻を踏みやすいということはあるのだろうか。以下は *Sonnets* 中の韻を踏む *lie* とその意味である。

be 動詞の意味……lie-eye の韻 1 回, lie-die の韻 2 回。

lies-eyes の韻 6 回, lies-dies の韻なし。

「嘘」の意味……lie-eye の韻 1 回 (動詞), lie-die の韻なし。

lies-eyes の韻 1 回 (名詞), lies-dies の韻なし。

die は *lie* が「嘘」の意味では韻を踏みにくい。次に *eye* とは押韻しないが、他の語と韻を踏むものを示す。

be 動詞の意味……lie-deny, lie-by, lie-qualify の韻各 1 回。

「嘘」の意味……lie-I, lie-why, lie-defy の韻各 1 回 (名詞 1 回, 動詞 2 回)。

lies-subtleties の韻 1 回 (動詞)。

次に何とも韻を踏まない、つまり文末にあらわれないものを示す。

be 動詞の意味……lie 1 回, lies 3 回, lying 1 回。

「嘘」の意味……lie 2 回 (名詞), lies 1 回 (名詞)。

be 動詞的な意味の時 *lie* はよく *eye* と押韻し、「嘘」の意味の時は、他の語と押韻するか、文尾に来ず、韻を踏まないと言える。

ここで *lie* の be 動詞の意味の中身の問題にも立ち入らざるを得ない。すなわち、その *lie* は be 動詞的な意味であるとしても、目的語や周辺の語によってその意味を限定されるのであって、同じ be 動詞とはいえ、「墓の中」とそれ以外の場所では、存在の仕方が違うわけである。そのことをもっと細かく見てみる必要がある。

lie が墓などの場所に限定されるときだけ *lie* は *eye* と韻を踏むのか、あるいはそうではないのか。例えば、1 番のソネットでは、*eyes* の三行前に *die* が文末にあらわれるし、他にも “buried” (11), “grave” (14) などが全体の雰囲気の規定している。このように、周囲に「死」を喚起させる語があるときに *lie* と *eye* が韻を踏むと言えるのだろうか。

以下が、be 動詞の *lie* が出てくるソネットと「死」を喚起する語である。なお、下線を付したものが *eye* や *eyes* と押韻するものである。各項目の最後に付けたのは、*lie* の主語および参考になる句である。

- | | | | | | |
|----|-------------|-------------------|------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| 1 | <u>lies</u> | (7) | die (2), buried (11), grave (14) | <u>eyes</u> (5) | abundance |
| 2 | <u>lies</u> | (5) | 該当するものなし、ただし、old (11, 13), forty winter (1) など | <u>eyes</u> (7) | all thy beauty |
| 24 | <u>lies</u> | (6) | 該当するものなし、 | <u>eye</u> (1), <u>eyes</u> (8, 9, 9, 10, 13) | your true image |
| 25 | <u>lies</u> | (7) | buried (7), die (8) | <u>eye</u> (6) | their pride (eye は die (8) と押韻。) |
| 31 | <u>lie</u> | (8) ⁵⁾ | dead (2, 7), buried (4, 9), grave (9) | <u>eye</u> (6) | things remov'd |
| 46 | <u>lie</u> | (5) | mortal (1) | <u>eye</u> (1, 3, 4), <u>eyes</u> (6), <u>eye's</u> (12, 13) | thou |
| | <u>lies</u> | (8) | [thy] fair appearance | | |
| 50 | <u>lies</u> | (14) | 該当するものなし、 | my grief | |
| 65 | <u>lie</u> | (10) | mortality (2) | Time's best jewel | |

- 73 lie (10) Death's (8), death-bed (11) the glowing of such fire
 81 lie (8) death (3), immortal (5), die (6), grave (7), entombed (8), dead (12)
 eyes (8, 10) men's eyes (lie は die と押韻。)
 92 lie (10) end (6), die (12) my life (lie と die は押韻。)
 101 lies (10)⁶⁾ tomb (11) 't
 109 lie (4) 該当するものなし, my soul
 137 lies (3) 該当するものなし, eyes (1, 5, 11, 13), eyes' (7) it
 153 lies (13) 該当するものなし, eye (9), [eyes] 14 the bath
 154 lying (1) 該当するものなし, the little love-god

lie と *eye* の音韻的なむすびつきが強いのは前半 50 番あたりまでで、その部分の押韻がもっとも多い。また、*eye* と *die* も押韻することから見て、*eye* と *die* の音韻的むすびつきも強い。このように、*eye*, *die*, *lie* の三者は、50 番までの部分でのむすびつきがもっとも強い。それに比べると、50 番以降のソネットにおいては、しだいに *eye* と *lie* の音韻関係が希薄になる。そのことをよく表す事実として、51 番以降、“dark-lady” sonnets に入る前までで、81 番を除けば *lie* と *eye* が同じソネット内にあらわれることはない、ということが指摘できる。しかし、この中間の詩群で、*lie* と *die* との関係はもっと深くなり、押韻もする。それに伴って「死」のイメージそのものと *lie* との関係も深くなり、今見た表で、この部分の「死」のイメージがもっとも多かった。“dark-lady” sonnets において、*lie* と *eye* の関係は回復するが、「死」のイメージを持たない「嘘」の意味が多くなる。そして *lie* や *eye* が「死」の文脈にあらわれることがあまりなくなる。

以上のことを確認する意味でも、次に「嘘」という意味で使われている *lie* を見てみよう。さきほどと同じように、*eye* と韻を踏んでいるものには下線を付す。

- 17 lies (7) tomb (3) eyes (5) this poet (lies は動詞。)
 72 lie (5) death (3), deceased (7), buried (11) you would devise some
 virtuous lie (lie は名詞。)
 115 lie (1) 該当するものなし, those lines (lie は動詞。)
 123 lie (11) 該当するものなし, ただし Time (1), thy scythe (14) thy records
 and what we see (lie は動詞。)
 138 lies (2) 該当するものなし, she (lie は動詞。)
lie (13) 該当するものなし, I (lie は名詞。また lie は pun である。)
lies (14) 該当するものなし, by lies we flattered be (lie は名詞。)
 150 lie (3) 該当するものなし, make me give the lie to my true sight (名詞。)
 152 lie (14) 該当するものなし, eyes (11), eye (13) so foul a lie (名詞。)

17 番と 152 番を除いて、*eye* と *lie* は押韻せず、しかも残りのソネットにはいっさい *eye* は出てこない。ここでのほとんどの *lie* は“dark-lady” sonnets のものだが、「死」のイメージも確かに少ない。

belied という語も *eye* のまわりに使われる。*belied* という語は *Sonnets* 中で 2 回、130 番と 140 番で出てくるが、どちらの場合にもそのソネットの中に *eye* がある。140 番の方には 7 行目に “deaths” がある。このソネットは例外的に “dark-lady” sonnets の中で *death, eye, (be-) lie* が同居する例であり、他にはこういう例はない。

以上見たように、*Sonnets* において *lie* は全体的に *eye* や *die* とのむすびつきが強いわけだが、そのむすびつき方は音韻面、意味面の両方にまたがり、前半のソネット群においては「死」の意味を通じて *die* と、後半においては「嘘」の意味を通じて *eye* とむすびつくと言える。

1.1.2. *die* が *eye* と押韻しなくても、*eye* の周辺にある例は実際には 2 例しかなく、1 番に “die” と、7 番に “diest” があるだけである。*die* は変化形を含めて、16 例あるが、*die* が *eye* と押韻するものも入れて、*eye* の周辺に存在する *die* は 4 例となる。比較のために *death* を例にとってみると、*death* とその変化形は 22 例あり、5 つは *eye* のまわりにある。

die と *eye* の音の響きが連想の根本にあるのだとしたら、*die* が *eye* とむすびつく割合は、音韻の力によって相乗化され、*death* が *eye* とむすびつく割合よりも大きいのではないだろうか、だが、*die* が *eye* の周辺にあらわれる場合が、あまりに少ないように思われる。そこから導き出される仮説は、Shakespeare が *eye* から連想するのはかならずしも *die* という語に限定されない広い意味での「死」のイメージそのものなのではないかということである。

今までは、*death* とその派生語のみを検討したが、それ以外の「死」を表す言葉も、*eye* の周辺に出やすいということも観察できる。たとえば、*kill, tomb* なども、*eye* の image-cluster の中に含まれる。

kill についてみれば、*Sonnets* 全体で 5 回、*kills* が 1 回あるが、そのうち 2 回は *eye* のそばに出る。そしてこの 2 度とも、周辺に *death* 関係の言葉はない。ということは、*kill* が *death* のそばにある確率よりも *eye* のそばにある確率のほうが大きいということになる。

tomb については、*tomb* 5 回、*tombs, tomb'd* が各 1 回の計 7 回の場合がある。このうち 2 回は *eye* の周辺にある。そしてその 2 回ともまわりに *death* はない。ただし、*tomb* の場合は *eye* が周辺にない時はほとんど *death, die, dead* がまわりにある。

このように、*kill* や *tomb* を考えに含めていくと、*eye* が「死」の文脈に多くあらわれるという例証の数はもっと増えることになる。

他の「死」を表す語について見れば、*bury, grave* などは、しばしば *eye* の文脈にあらわれる。*beried* は 5 例、*buried* が 1 例あり、以下の通りである。

1 <i>buried</i> (11)	<i>eyes</i> (5)	<i>die</i> (2)	<i>lies</i> (7)
25 <i>buried</i> (7)	<i>eye</i> (6)	<i>die</i> (8)	<i>lies</i> (7)
31 <i>buried</i> (4, 9)	<i>eye</i> (6)	<i>dead</i> (2, 7)	<i>lie</i> (8)
64 <i>buried</i> (2)	<i>death</i> (13)		
72 <i>buried</i> (11)	<i>death</i> (3)	<i>lie</i> (5)	

注目すべきは、*eye-die-lie* のグループに *bury* がうまく入り込んでいることで、これは、「死の床に横たわる」イメージそのものである *bury* の働きからして当然のことなのではあるが、その *bury* 6 例中 4 例までは *eye* が文脈にあらわれているという事実である。

grave について見れば、単数形は 3 回、複数形が 1 回出てくるが、複数形以外はすべて *eye* の文脈である。

- | | |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 grave (14) | 上記 <i>buried</i> に共通。 |
| 31 grave (9) | 上記 <i>buried</i> に共通。 |
| 77 graves (6) | 該当するものなし、ただし <i>glass</i> (1, 5), <i>look</i> (13) (1.1.5. 参照) |
| 81 grave (7) | <i>eyes</i> (8, 10) <i>death</i> (3), <i>die</i> (6), <i>dead</i> (12) <i>lie</i> (8) |

他にもこういう種類の言葉は多くあるのだろうか。そのソネット中にすでに「死」を表す *death* 等が存在する場合は重複になるので省くとして、例えば次のような例では、全体の雰囲気として、「死」が話題になっていることは確実である。

Those hours that with gentle work did frame
The lovely gaze where every *eye* doth dwell
Will play the tyrants to the very same,
And that unfair which fairly doth excel:
For never-resting time leads summer on
To hideous winter and *confounds* him there ... (5.1-6)

強いて「死」を示す語を限定しようとすれば、「*confounds*」になろうか。必ずしも *death* 自体があらわれなくても「死」をほのめかす文脈ということで見えていくと、*eye* が見つかることがある。そういう例を示す。

- | | |
|-----------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| 14 end (14) | <i>eyes</i> (9) |
| 16 decay (3) | <i>eyes</i> (12) |
| 23 decay (7) | <i>eyes</i> (14) |
| 46 mortal (1) | <i>eye</i> (1, 3, 4), <i>eyes</i> (6), <i>eye's</i> (12, 13) |
| 47 famish'd (3), smother (4) | <i>eye</i> (1, 3, 5, 7), <i>eye's</i> (14) |
| 114 poison'd (13) | <i>eye</i> (3, 11, 14) |
| 119 potions (1) ⁷⁾ | <i>eyes</i> (7) |
| 127 mourners (10), mourn (13) ⁸⁾ | <i>eyes</i> (9, 10) |
| 132 mourners (3), [mourning] (9) ⁹⁾ , mourn, mourning (11) | <i>eyes</i> (1, 9) |
| 14 plagues (4) ¹⁰⁾ | 上記 <i>end</i> に共通。 |
| 114 plague (2) | 上記 <i>poison'd</i> に共通。 |
| 137 plague (14) | <i>eyes</i> (1, 5, 11, 13), <i>eyes'</i> (7) |
| 141 plague (13) | <i>eyes</i> (1) |
| 118 maladies (3) | <i>unseen</i> (3) (1.1.4. 参照) |
| 153 maladies (8) | <i>eye</i> (9), [<i>eyes</i>] (14) |

さて、ここまでで、いくつぐらいの *eye* という語が「死」の文脈にあらわれるといえるだろうか。逆の場合を数えると、35個の *eye* や *eyes* が「死」の文脈に出てこないと言っておこう。全体の総計が、*eye* 38, *eyes* 51 それに所有格や *eyelids* を含めて 96 であるから、3分の2に近い *eye* は「死」の文脈にあることになる。

1.1.3. *time* という語がルネッサンスにおいて死神を表していたことは注目値する。¹¹⁾ 実際、*Sonnets* においても、*time* という語は、しばしば「死」を表し、そして *time* もまた多く *eye* の近辺にあらわれる。

典型的な擬人化される Father Time の例は 19 番で、この *time* は Riverside 版でも capitalize されている。

Devouring Time, blunt thou the lion's paws,
And make the earth devour her own sweet brood;
Pluck the keen teeth from the fierce tiger's [jaws],
And burn the long-liv'd phoenix in her blood ... (1-4)

このソネットには直接 *death* 等の語はあらわれない。しかしこの詩の題材が「死」であることは明らかで、こういったことを考えにいれると、*time* という語そのものを「死」のイメージとしてとらえ直してみるの必要を感じる。*time* が必ずしも死神を表さなくても、「死」と関連をもち、そのことによって *eye* とむすびつくといった事情もあり得るのだろうか。

以下は *Sonnets* 中の *time* の総体である。周辺に「死」を示す語があらわれる場合はイタリックにし、*eye* が近くにあるものには下線を引く。また、*time* の意味をくみ取れるような語も付けた。

1 <i>time</i> (3)	die (2) eyes (5)	by time decease
3 <i>time</i> (2, 12)	tomb (7)	now is the time, thy golden time
5 <i>time</i> (5)	confounds (6) eye (2)	never-resting time
6 <i>times</i> (8, 9, 10)	death (11), death's (14)	ten times
11 <i>times</i> (7)	die (14)	the times should cease
12 <i>time</i> (1, 10)	die (12)	the clock that tells the time, the wastes of time
<i>Time's</i> (13)	scythe (13)	Time's scythe
15 <i>Time</i> (11, 13)	Decay (11)	wasteful Time, war with Time
16 <i>Time</i> (2)	decay (3) eyes (12)	this bloody tyrant Time
<i>time's</i> (10)		this time's pencil
17 <i>time</i> (1, 13)	tomb (3) eyes (5)	time to come, some child of yours alive that time
18 <i>time</i> (12) ¹²⁾	Death (11) eye (5), eyes (13)	eternal lines to time
19 <i>Time</i> (1, 6, 13)	devouring (1)	devouring Time, swift-footed Time, old Time

- 22 *time's* (3) death (4) time's furrows
- 30 *time's* (4) death's (6) eye (5) time's waste
- 32 *time* (5) Death (2), died (13) the bettering of the time
- 37 times (14) 該当するものなし, ten times
- 38 times (9) 該当するものなし, ten times
- 39 time (11, 12) 該当するものなし, entertain the time, time and thought
- 44 *time's* (12) kills (9) time's leisure
- 47 *time* (7) famish'd (3), smother (4) eye (1, 3, 5, 7), eye's (14) another time
- 49 *time* (1, 1, 5, 9) eye (6) against that time, if ever that time come
- 52 time (9) 該当するものなし, the time that keeps you as my chest
- 55 *time* (4) death (9) eyes (11, 14) sluttish time
- 57 times (2) 該当するものなし, times of your desire
time (3) no precious time
- 58 times (2) 該当するものなし, your times of pleasure
time (10) privilege your time
- 60 *Time* (8, 9) end (2) Time that gave, Time doth transfix
times (13) scythe (12) times in hope
- 63 *Time's* (2) confounding age's cruel knife (10) Time's injurious hand
time (9) for such a time
- 64 *Time's* (1) buried (2), mortal (4) Time's fell hand
Time (12) death (13) Time will come and take my love away
- 65 *Time* (8) mortality (2) Time decays
Time's (10, 10) Time's best jewel from Time's chest
lie hid
- 70 time (6) 該当するものなし, ただし canker (7) being woo'd of time
- 73 *time* (1) Death's (8), death-bed (11) that time of year
- 76 time (3) 該当するものなし, with the time
- 77 *Time's* (8) graves (6) Time's thievish progress
- 82 time-bettering (8) 該当するものなし, the time-bettering days
- 97 *time* (5, 5) decease (8) this time remov'd was summer's time
- 100 *time* (6) decay (11) time so idly spent
Time (10, 13) scythe (14) if Time have any wrinkle graven
Time wastes life
- Time's* (12) knife (14) Time's spoils

106	<i>time</i> (1, 10)	dead (4) eye (6), eyes (11, 14)	wasted time, this our time
107	<i>time</i> (9)	Death (10), tombs (14)	this most balmy time
108	<i>time</i> (14)	dead (14)	time and outward form
109	<i>time</i> (7, 7)	該当するものなし,	to the time, with the time exchange'd
115	Time (5)	該当するものなし, ただし tan, blunt (7)	reckoning Time
	Time's (9)		Time's tyranny
116	Time's (9)	sickle's (10)	Time's fool
117	<i>time</i> (6)	該当するものなし,	and given to time your own dear-purchas'd right
120	<i>time</i> (6)	該当するものなし,	a hell of time
123	Time (1)	scythe (14)	Time, thou shalt not boast that I do change
124	Time's (3, 3)	die (14)	Time's love, Time's hate
	<i>time</i> (8)		th' inviting time
	Time (13)		the fools of Time
126	Time's (2)	sickle (2)	Time's fickle glass
	Time (8)	kill (8)	Time disgrace

大文字の *Time* がほぼ「死」の文脈にあるのは当然として、擬人化されない *time* であっても「回数」の意味であっても、「死」の文脈にあらわれる。*time* の総体が、*time* 53, *time's* 16, *times* 9, そして *time-bettering* 1 という全体 79 例のうち 22 例を除いて「死」の文脈にある。eye との関係を見ると、とくに前半 20 番あたりまでに eye の周辺に出る *time* が集中する。

奇妙なことに、“dark-lady” sonnets には *time* という語がひとつもあらわれない。“dark-lady” sonnets 中に「死」の文脈がまったくなくなったわけでないから、もし *death* 関係の語に *time* を連想させる力があるのであれば、なんらかの形で *time* という語が残っているはずである。そういうことを考えると、*time-death* の連想は、*death* から *time* に流れているのではなく、逆に *time* の方に *death* を喚起する力があるとも言えそうだ。

hour という語はどうだろうか。*hour* も時間を表す言葉として *death* や *eye* のそばに使われるのだろうか。以下に *hour* の総体を挙げる。イタリックは「死」の文脈、下線は *eye* がそばにある場合である。また、*time* がそばにある場合も示す。

5	<i>hours</i> (1)	eye (2)	confounds (6)	<i>time</i> (5)
16	<u>hours</u> (5)	eyes (12)	decay (3)	Time (2), <i>time's</i> (10)
19	<i>hours</i> (9)		devouring (1)	Time (1, 6, 13)
33	<u>hour</u> (11)	eye (2)		
36	<i>hours</i> (8)			
52	hour (3)			<i>time</i> (9)

57 hours (2), hour (5)	times (2), time (3)
58 hours (3)	times (2), time (10)
61 hours (7) eyelids (2), eye (10)	
63 hours (3)	crush'd (2) Time's (2), time (9)
68 hours (9)	died (2), dead (5, 8)
116 hours (11)	sickle's (10) Time's (9)
124 hours (10)	die (14) Time's (3, 3), time (8), Time (13)
126 hour (2)	kill (8) Time's (2), Time (8)
146 hours (11)	Death (13, 14), dead (14), dying (14)

イタリックと下線の分布を見ると、後半のソネットの *hour* 周辺に「死」のイメージが多く、*eye* は前半に集中していることがわかる。*death* という語自体は出ないとはいえ「死」のイメージは *eye* のそばにあらわれる。そして中間の、*death* も *eye* も出てこない詩群では *time* はすべて小文字である。こうしてみると *hour* もやはり *eye* や「死」のイメージの周辺にあることがわかったが、そのあらわれ方は二次的で、*hour* は *time* のように自ら「死」のイメージを呼び起こすことはできないこともわかる。なぜならば、*hour* 自身に「死」を喚起する力があるのであれば、小文字の *time* の文脈に出てくる *hour* のまわりにも「死」にイメージは出てくるはずで、そうっていないということは、(筆者は 5 番の *time* は基本的に大文字の *Time* であると考え。)「死」のイメージを導く力を *hour* は大文字の *Time* に頼っていると考えられるからである。

1.1.4. *Sonnets* 全体の中での *time* の分布はどうだろう。1-50 番に 34 個、51-100 番に 27 個、101-154 番に 18 個ある。そして *death* の派生語がそれぞれ 20 個、22 個、13 個ある。中間のソネットに *death* 関係の語が多いにもかかわらず、それが *time* の周辺に出ないのはなぜだろう。前半 50 のソネットの *time* のまわりに *death* の派生語は 9 回あらわれるのに、中間の 51-100 番までには 4 回しか出てこない。(101-154 番までに *death* の派生語は 13 個しかないが、それでも 4 個は *time* の周辺にある。) 大文字 *Time* 自体が少ないということはなく、かえって中間の詩群に使われる大文字の *Time* の方が多いのである。それでは理由は何だろう。

筆者は *eye* が *Time* と *death* の仲立ちをしていると考えているわけで、その *eye* という語自体の減少が *Time* と *death* の間を引き裂いていると思うのである。それでは、「死」の意味を持った *Time* を、「死」のイメージそのものである *death* 以上に *eye* にむすびつける力とは何なのだろう。もちろん、意味のレベルの力ではない。それは、「韻」の力、はっきり言うと、*assonance* の力なのである。

意味的に「死」のイメージ同志がむすびあうのは至極当然のことである。しかし、連想を統率しているのは、すべて意味に関連する事柄ではないわけであり、まして、音韻的才能が強く要求されるソネット作品において、Shakespeare が意味のレベルでの語間の関係よりも、音

的な方向に意識的、無意識的に引き付けられたとしても、不思議ではない。

細かく検討するために、*time*, *eye*, *die*, *lie* の各語の分布を見てみよう。同じソネット内に *time* と *eye*, *die*, *lie* のいずれかが一緒にあらわれる例は、1-50 番までに 12 例あり、51-100 番までには 3 例しかない。101-154 番までには、*time* は 126 番を最後にあらわれなくなっても、それでもなお 5 例ある。ということは *time* という語の数で数えた場合、1-51 番までの 34 個の *time* のうち 20 個は [ai] の音の響きをもった語と同じソネット内にあるわけである。これは過半数である。ところが、その同じものの数は 51-100 番の 28 個の *time* のうち 5 個しかない。101-154 番には 18 個のうち 11 個ある。

すこし詳しく見ると、*time* と同一ソネット内に、

	1-50 番	51-100 番	101-154 番
<i>eye</i> (s) その他……………	13	2	3
<i>die</i> " ……………	6	0	1
<i>lie</i> (s) ……………	2	2	3

ということになる。すなわち、1-50 番のソネットでは *time* が *eye* や *die* と同じソネット中にあらわれ、51-100 番ではそうはならないである。51-100 番に *die* そのものが少ないわけではない。1-50 番に *die* とその派生語は 9, *lie*(s) は 9 個あり、51-100 番に *die* は 6, *lie* は 5 個ある。このように絶対数の上ではあまり差はないのに、なぜ *die* は 51-100 番のソネットの *time* のそばにあらわれないのか。筆者はそれを *eye* の絶対数が 51-100 番で減少することと一緒に考えていいと思う。(*eye* という語の *Sonnets* 中の分布を見てみると、1-50 番に 43 個、51-100 番に 16 個、101-154 番に 37 個である。)

上の表では 51-100 番の *eye* に 2 例あるようになっているが、それは実際には同一ソネット内で、その 55 番のソネット内の “eyes” は “arise” と韻を踏むわけで、つまり、51-100 番の中には音韻を中心にした *die* と *eye* のつながりがまったくないことになる。そして、その 55 番のソネット内には *death* という言葉自体があらわれるわけであるから、この例外的な *eye* が意味的に「死」のイメージにつながっているだけで、音韻的には何にも左右されていないことは明らかである。更に言えば、51-100 番の 2 つの *lie* についても、一方は押韻しないし、他方は押韻するといっても “by” と押韻するわけであるから、1-50 番の *lies* の 2 例が両方とも *eyes* と押韻することとは、自ずと性質を異にしている。(51-100 番の *lie* 2 例ともそばに「死」のイメージがある。) 以上総合すると、51-100 番においては、検討した各単語間の音韻的なむすびつきがほとんどなく、もっぱら意味的にむすびついていると言える。(101-154 番についての検討はしなかったが、*die* は全体の唯一例で、*lie* は 101-126 番までに 4 つしかないことを付記しておく。)

51-100 番のソネットにおいて音韻的な語間のむすびつきがまったくないか、ほとんど見られないのだとしたら、*time* と *eye* が持っている *assonance* の響きに対する感覚も薄れているだろ

う。ということは、Shakespeare が、冒頭の詩群を書いていた頃の音韻的な感覚を 51-100 番において失っているはずである。別の言い方をすれば、1-50 番のソネットにおいては各語が [ai] の音を中心にして音韻的に結び合い、そしてさらに意味的にもむすびつきあっているのに比べて、51-100 番のソネットにおいては語はもっぱら意味的なむすびつき方をしているとも言える。そのため *time* を引き付ける力が *die* 等の言葉になくなったのではないだろうか。

1.1.5. これまでは「死」のイメージの枠を *death* 以外の語にまで広げて考えて来たが、「目」のイメージも同様に広げて考えられると思われる。すなわち、*eye* という語のみに限定しなくても、他の語が「目」のイメージを示している場合もあり得るので、それも考察の対象になるとと思われる。

例えば、*glass* という語がよく *Sonnets* 中にあらわれるが、これはどうだろうか。「死」のイメージのそばに必ず出てくるだろうか。もちろんここで筆者は *glass* の「鏡」としての意味について述べているわけだが、*glass* に “hourglass,” “vessel” などの意味があるということが問題を複雑にしている。まず *glass* をすべて挙げてみよう。*eye* のそばの場合は下線、「死」の文脈のものはイタリックを付す。また、*glass* のそれぞれの意味も付ける。そして *time* が近くにある時はそれも付ける。

3 <i>glass</i> “mirror” (1, 9)	tomb (7), die (14), dies (14)	<i>time</i> (2, 12)
5 <i>glass</i> “vessel” (10)	<i>eye</i> (2)	<i>time</i> (5)
22 <i>glass</i> “mirror” (1)	death (4), slain (13)	<i>time’s</i> (3)
62 <i>glass</i> “mirror” (9)	<i>eye</i> (1)	
77 <i>glass</i> “mirror” (1, 5)	graves (6)	<i>Time’s</i> (8)
103 <i>glass</i> “mirror” (6, 14)		
126 <i>glass</i> “mirror” (2)	kill (8)	<i>Time’s</i> (2), <i>Time</i> (8)

“mirror” の意味の *glass* が *eye* のそばにあらわれるのは、類縁のある語として当然だろう。しかし *eye* が “vessel” の意味の *glass* のあるソネットに出てきたり、*glass* の文脈にしばしば *time* があらわれるということを説明しようとする、どうしても、*glass* のなかの混じりあった意味範囲を想定してみる必要があると思われる。すなわち、*glass* という語の持っている “hourglass” の意味が、表面にあらわれなくても、Shakespeare の連想を裏側から支えていて、*time* という語を促し、ひいては Father Time を発想させ、「死」のイメージを定着させた、とは考えられないだろうか¹³⁾。

その他の語はどうだろう。*look, gaze* といった言葉はほとんど *eye* のそばにしかあらわれないので、繰り返しになるものは省くが、*see* を見ると多少面白い点に気付く。*see* が *eye* のあらわれる文脈以外で「死」のイメージのそばにある場合を以下に挙げてみよう。

12 <i>see</i> (2, 5, 12)	die (12)	<i>time</i> (1, 10), <i>Time’s</i> (13)
64 <i>seen</i> (1, 5, 9), <i>see</i> (3)	buried (2), death (13)	<i>Time’s</i> (1), <i>Time</i> (12)

67 seeing (6)	dead (6)	
68 seen (9)	died (2), dead (5, 8)	
73 seest (5, 9)	Death's (8), death-bed (11)	time (1)
92 see (7)	die (12)	
99 see (14)	death (13)	

このうち *time* が含まれるものは、前項の分析に説明を譲るとして、注目すべきは、まわりに *eye* も *time* も出てこないのに、なおかつ *see* や *look* が *death* 関係の語に近い場合である。今、67 番を取り上げよう。

Ah, wherefore with infection should he live,
 And with his presence grace impiety,
 That sin by him advantage should achieve,
 And lace itself with his society?
 Why should false painting imitate his cheek,
 And steal *dead seeing* of his living hue? (1-6)

この場合“seeing”は“appearance”という意味で、直接「見る」行為を喚起する力は弱いだろう。ただ、60 番あたり以降は Time による影響を述べるソネットの集団であることを思ってみれば、この 67 番のソネットにおいても、主題は同様と思われるので、例えば、62 番におけるような、“But when my *glass* shows me myself indeed” (9) といった鏡のイメージが発想の根本にあって、それが“seeing”という語に定着したと考えることは、あながち間違いとも言えないのではないだろうか。

68 番のソネットを見よう。

Thus is his cheek the map of days outworn,
 When beauty liv'd and *died* as flowers do now,
 Before these bastard signs of fair were born,
 Or durst inhabit on a living brow;
 Before the golden tresses of the *dead*,
 The right of *sepulchres*, were shorn away,
 To live a second life on second head;
 Ere beauty's *dead* fleece made another gay:
 In him those holy antique *hours* are *seen* ... (1-9)

散在する「死」のイメージ、そして、“hours”という語に含意される Time the Reaper の影に気が付けば、この“seen”という語を見逃すわけにはいかない。裏に隠されたのはやはり「鏡」あるいは「目」、「見ること」のイメージであり、そうしてみると、この“seen”を *eye* が死の文脈にあらわれる例の一例に加えることに、(*eye* 自体はあらわれないのだが、) 筆者は躊躇しない。このように、「死」のイメージと「見る」行為自体が Shakespeare の発想のなかでむすびついているといえるだろう。(以下続稿)

注

- 1) image cluster の考え方については、E. A. Armstrong, *Shakespeare's Imagination* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1963) 参照。
- 2) C. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery* (1935; rpt. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1977), p. 192 参照。
- 3) シェイクスピアからの引用は、*The Riverside Shakespeare*, gen. ed. G. Blakemore Evans, et. al. (Boston: Houghton Mifflin, 1974) に拠る。
- 4) 韻については、ほとんどの韻が分析されている H. Kökeritz, *Shakespeare's Pronunciation* (New Haven: Yale Univ. Press, 1953), pp. 399-495 参照。
- 5) Stephen Booth 編纂の *Shakespeare's Sonnets* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1977), p. 184 において、*lie* の中に “buried” の意味を認めている。
- 6) Booth, p. 329 で同じくこの *lies* に “bury” の意味を認めている。彼はさらに “dyed” (2) のなかに *die* との関連を見ている。
- 7) あえて *potions* を「死」のイメージに含める。Booth, p. 400 参照。
- 8) *mourners*, *mourn* 等が確実に「死」を表すとは言い難いと考えられるが、“black” (1, 3, 9) という色は「死」をはのめかすのではないだろうか。
- 9) *mourning* は pun である。Booth, pp. 457-59 参照。
- 10) *plague* は現代よりも「死」に近かった。なお、*Sonnets* に *plague* は4回出るが、すべて *eye* のあるソネットである。
- 11) Ann and John O. Thompson, *Shakespeare, Meaning and Metaphor* (Brighton: The Harvester Press, 1987), 第一章参照。
- 12) 7行目の “sometime” については、多くの版では “sometime” を採用しているが、Oxford 版 (S. Wells 編纂, 1985) では “some time” と区切っている。Q では “some-time”。
- 13) Booth, p. 138 参照。